

針葉樹會報

復刊第17号

1967. 2





発行日 1967年2月15日	針葉樹会報 復刊第17号	編集人 東京都府中市若松町 5-6-11 三井物産寮内 倉知敬
発行所 針葉樹会社		
印刷所 錦光社		

野沢温泉合宿の思い出

近藤恒雄

(一)

は只ワアく組で其の脳やかな事は言葉では表現できない。その時の事件の二、三を一寸紹介する事にする。

スキーで来ましたあの山間を
雪の野沢へ湯の宿へ。
晴れて嬉しや妙高火打
間を隔てて信濃川。

スキー揃えて腰打ち掛けて
見る夕日の茜さし。

スキーペれに家路を急ぐ
宮の杜かけ一つ星。

野沢湯の宿

炬燵のつどい

スキーペれを湯は流し。

針葉樹(へかづま)
二号より

今から四十数年前の話。毎年十二月末になると「千曲
渡ればなあー野沢のお出湯よー」と良く歌った、其の野

沢温泉さかや旅館に東京商大山岳部のスキー合宿が始まる。毎年殆ど同じ様な顔振れに臨時に参加した「ヒヤカシ」商大生も入れてのスキー合宿であった。

吉沢、杉本、五十嵐、渡辺、村尾、小栗等の先輩から高木、赤城、森竹といった同級諸公。

記憶が余りはっきりしないが、今から考えると「とんちゃん」こと五十嵐氏が合宿統制委員で松木、五十嵐氏が技術指導係、残り渡辺、吉沢、村尾、小栗外我々年級

或る朝目が覚めた私は、どうした理かどうしても起きられない。胸の辺が押し潰されそうに苦しい。よくお化けの夢を見た時の様に逃げ出そうにも逃げられない気持ちである。

これがこの合宿の恐る可き布団蒸し制裁である。朝ぐずぐずしていると早く起きた者が自分の寝具をジャンジヤン寝ている者の上に積み重ねて果てはその上に乗っかり乱暴狼藉に及ぶ。

悪い奴輩である。今と違つて昔の布団は綿も沢山入っていて一枚でも相当な重さである。今頃の年配だったら腰が抜けてしまった事だろうと思うが若さは有り難いものである。

(二)

或る冬、臨時参加した「ヒヤカシ」組のS君が毛無山に同行した。帰り確かに「上の平」まで一緒にいた事は分つてゐるが「さかや」に帰つて風呂に入つてもS君が帰つてこない。さては途中で何処か迷つてしまつたのではないかと又々スキーで温泉側の急坂を登り野沢峠に探しに行つた。処が峠のかなり下つた処にS君のスキーが木に引掛つて体が下にぶら下つてゐる。このS君は長身でその何んとも云えない滑稽な格好が今でも忘れられない。

本人は日正に没せんとしている山中に一人木にぶら下っているのだから生死の関頭に立つてへ？」いる理である。このSはスキーを尻の下にして山を下った、その格好がおかしくても誰も同情してくれる者がない。

(三)

野沢には鉄索の尾根というものがあった。今でもその鉄索があるだろうか。私には一番恐ろしい尾根でよく毛無山の帰り統制委員のとんちゃんが「帰り鉄索尾根経由」と宣言すると「ドキン」としたものだ。何しろこの尾根の途中にある一本松まで下って来てそれから下は余り傾斜が急なため下が見えない。

「エイッ」と目をつぶって直滑降、それから二三秒後は空中回転数回で雪の中に頭が下になっている事だけは分るが後どうなっているのやらさっぱり分らない。ストックも眼鏡も勿論紛失、モジモジしていると「ピュウ」と音がしてとんちゃんが矢の様に側を滑って行ってしまった。

(四)

この「さかや」に老いた女中さんがいて、「この旅館にいた美人女中の××子が小学校の先生と上境駅そばの雪の千曲川に飛びこんで自分だけ岸へ岸へと泳ぎ上ってしまった」と

手振り身振りで説明してくれた事は記憶に残っている。その後渡辺九郎ちゃんやベンちゃんが何か云うとすぐ「岸へ！」と云つて人をだます素振りをしていたが今のベンちゃん知っているだろうか。

(五)

食事が始まると必ず熊さんの側に座る事にしている。熊さんのお膳に乗っている玉子焼が食べ度い一心である。彼はどうしたものか玉子焼には全然手をつけない。私には有難い友人である。この時の玉子焼の味が忘れられない。

——以 上 ——

殆ど登りとは氣付かぬ程の登りを行きつめると、野沢温泉に出る。山中の盛り場と言い度い所だ。流石は昔からの湯治場で、結構立派な宿屋が三十幾軒。階段状に層をなした家並みは、好き勝手に列んでいて几帳面でない処が面白い。

松倉栄司「野沢の事ども」

針葉樹二号より

目 次
野沢温泉合宿の思出……
針葉翁樹会のこと……
道志の閑寂境……
利 尻 岳 …… 宮 本 英 治
黒薙尾根より白馬岳……
会 務 報 告 …… 中 島 寛
冬 山 合 宿 報 告 —— そ の 反 省 の 記
カ ラ コ ル ム 遠 征 先 遣 隊 報 告 · そ の 4
佐 藤 之 敏 (13) (10) (8) (7) (5) (4) (3) (1)

針葉翁樹会のこと

岩崎利三

岩崎利一

あれは昨年の十月下旬だったであろうか。
銀座の街頭でバツタリ小林重吉さんにお遇い
した・そのとき翁樹会のことが話に出て、手
頃なところ、つまり安直で寛げる会場はどこ
かということで、それには最近出来たての築
地スエヒロがどうだろうということになつた
早速中川孫さんに申し上げて本ぎまりになり
今回は昭和十九年卒からとして五十通案内状
を発信した。

この昭和四十一年には、渡辺九郎、磯野計
藏の両会員を喪ったこととて、在りし日の両
氏の思い出が先づ話題になつた。私も、渡辺
さんとは鎌倉の史跡めぐりを何回かご一緒し
たり、鎌倉のお寺の絵を領けて頂いたことも
あり、殊に晩年のおつきあいが印象深く、と
ても亡くなつたことが信じられない程である
殊に鎌倉二階堂の杉本寺の絵は、私が借りて
いる部屋から見た本堂で、たつた一枚だけ初
夏の杉本寺を描くとすれば、そこしか無いと
思われる図柄だった。駅前の「扉」の個展で
も、この絵は光っていた。私は今でも初夏に
は時々この絵をかけて見ている。

父東沢行や、北岳バツドレス行などで賑わった。昭和四十一年の秋は紅葉が殊に美しい年だつたのではなかと思われるが、カラー写真に見る紅葉の山々は実にすばらしい眺めだった。それに交通の便利さは大したもので、孫さんの表現によれば、「甲府から車に乗つて気がついたらもう北岳は目の前、もつたいてなくてもつたいなくて」という次第。こういう機会に色々のルートを聞いておかないと、昔の知識では凡そ想像もつかない交通事情になつているわけだ。

スキ焼も酒もまずまず充分に廻って、いつまでも歎は尽きなかつた。

偶々在日中の森脇さんにもご連絡したが、生憎日程がつまつていて残念なことであったしかし十一月十七日の当日出席のメンバーは次の通り大盛況で、頗る愉快な集まりになつた。

思われる図柄だった。駅前の「扉」の個展でも、この絵は光っていた。私は今でも初夏には時々この絵をかけて見ている。

無用の用といふことばがあるが、単に有用の会、単に無用の会が多いなかで、針葉樹会——翁樹会も根本は針葉樹会である——は、本当に無用の用を感じさせる集まりだと思う。次の幹事に指名された手塚、中島、久保の三氏に呉々もよろしくお願ひして、私の報告を終りとする。

中川孫一、吉沢一郎、村尾金二、近藤恒雄
金田一郎、久保田礼治、手塚晴雄、吉沢松
次郎、増山清太郎、高見要、鈴木英雄、
中島孚、柿原謙一、小林重吉、望月達夫
榎本直司、日江井正己、佐野茂雄、山田亮
三、久保孝一郎、原田豊、小林茂雄、

仰しゃつたらしく、磯野さんはそのまま帰られた様子で、学生達と一緒に飲み食いはされなかつたのではないかと思うが、如何にもの貴公子的な面影は忘れ難いものであつた。兩氏のご冥福を祈つた後、話題は最近の秩

味のかかる布団だったが、よく眠れた。

静かな尾根道

昨日とは、うって変ったすばらしい快晴である。戸渡部落から指導標について本坂峠（道志峠）と赤鞍岳（朝日山）への道に入り、しばらく行って本坂峠道を左に分ける。このあたりから踏跡はあやしくなったが、大凡の見当をつけ二、三の分岐を右へ右へととつて十一時山頂に立つ。南面は低い笹とカヤト、北は樹林の静かな山頂から西空はるかに南アルプスの銀嶺が輝いて見える。ここから真東に延びた尾根道は、道志山塊のオ一主脈で、南に道志川の谷、北に秋山川の谷を見下しながら、鳥谷立山（一〇四八m）まで約五キロの間、処々に高原状の笹原を支えながら続いていた。南の空を区切る丹沢主脈は、恐らく蟻の行列のような混雑であろうに、この尾根道は、前夜泊り合せ、一時過ぎ赤倉岳（一二五七m）でめぐり合った男女五人のパーティの他には入っ子一人行き合わない静かな山道だった。鳥谷立山から逆落しに送電塔のたつ岩道峠に降る。安寺沢の梅花の道を選んだものの、どこからウンザリするような長丁場が、藤野（又は上野原）まで続いていた。秋山川畔の一古沢までくると、早春の陽はトップブリと暮れてしまつた。

利尻岳

宮本英治

八月中旬、大塚先輩と日銀の板東氏、毎週北海道の山歩きをしている小野君と四名で、利尻・礼文島へ行くことになった。利尻島は

札幌に住んでいても急行で九時間半、さらに船で三時間もかかる辺地だけに、日高山脈へ入るより一大決心が必要である。

「望月カンちゃんも礼文岳へは登っていないはずだから、ぜひ行ってみようじゃないか・お金なら心配しなくてもよい」

との大塚法王様の言で小生も重い腰を上げることにした次第。

八月十二日 夜行列車の通路にごろ寝して

六時半稚内駅着。小雨の中をタクシーで稚内公園へ行き冰雪の門見物。さらに観光バスにて宗谷岬へ行く。日本最北の地と刻まれた石碑があるだけの砂浜で見る程の価値はなし。

十二時稚内港から三〇〇トン程の連絡船に乗り込む。さっそく座敷に陣取り、使用禁止の救命具を枕にごろっと横になつたら「東大卒の紳士がそんな事をしては困る」と係員に注意され苦笑。稚内の岬を出る迄、船はかな

りゆれ、小野君の寝てる顔に突然若い女性のはいたシップキがかかり大笑い、彼のほやくこと。

三時、利尻島の鷺泊に上陸。さらにバスで宿泊地鬼脇へ行く。利尻島はコンブとウニで有名であるが、カラスの多いのに驚く。カラスの鳴き声に不吉な感じを抱くが家々の屋根に必ず数羽とまり、又群れなし飛ぶ姿を見てはそんな先入感も消しとんてしまう。

宿では火鉢に炭を入れてくれた。ウニで一杯やるも大塚さんが酒を呑まぬので気勢上らず。

八月十三日

六時起床するも、利尻岳は濃霧に囲まれている。無理することもないと沈没に決定。これで礼文岳登頂はあきらめとなつた。散歩がてら一時間程の距離にある沼浦湖へ出かける。静かな湖で、水鳥がギャーギャー鳴くだけで人影なし。午后からマージャン。大塚さんの一人勝ち。

「僕のマージャンに負けるようでは、君達の腕もたいしたことはないね」

と云われてしまった。

八月十四日 利尻岳の上半部は相変らずガ

スに包まれているが昨日よりまし。八時半宿

を出て原始林の中の道を歩く。セミの抜けが

らがエゾ松に数匹ずついる。一時間程で沢を

横切り、こわれかけた山小屋を過ぎ、オニベ

ンチへ着く。上はガスっているが下はすっか

り晴れ、仏法志、沼浦湖、鬼脇の町、そして

海には連絡船が見える。この辺一体は背丈程

の熊笹がびっしり生え、登山道はこの熊笹を

切り開いてつけてある。北海道の山では熊の

心配があるけれど、利尻にはいないので安心

して登っていられる。

鬼脇からの登山コース、東稜は、上級者向

きとなつてゐるだけあって、千丈敷、松ヶ峰、

胸つき八丁、馬の背、くさり場等続き、変化

とスリルのあるコースである。途中南稜のロ

ーソク岩が見えたが、頂上近くはとうとう現

われなかつた。キャラバンシユーズの大塚先

輩、快調のピッチで登る。急ぐ山もあるま

いとのんびり高山植物を楽しみつつ登るうち

に、岩峰にかこまれた場所を過ぎるとお花畠

の上に頂上があった。

ゴミが散らかり、ラジオをならした連中が

いてがっかりさせられる。晴れてれば三六〇

度の展望を楽しめるのに残念。こんな高い所迄カラスがいる。あきれた鳥だ。

「デパートでおいしいのをくれと一番高いリンゴを買ってきたがさっぱりうまくない」と、大塚さんが云えば、

「そうですねえ」

と、首をタテに振つて小野君がリンゴを食い乍ら返事をする。また、彼は年中山歩きをしてゐるだけあって、元気一杯うらやましい程である。板東氏はちよこちよこと写真を写し廻つてゐる。

下りの鶴泊コースは火山灰の単調な急斜面が続き、興味の薄いコースだ。這松帶を過ぎ

ると熊笹が斜面を完全に覆つてゐる。水場ありテントを張る連中が遊んでゐる。礼文島が

左手に見えるが期待してきた樺太は、それらしきものが海の彼方にはあるが、雲と区別で

しきす、最後迄確認出来なかつた。鶴泊の町の

入口に、南極帰りの樺太犬が暑さにあえぎぐ

つたりしてゐた。最北の山といえども結構む

し暑く半ズボン姿で登つて調度良いのだから

南極に住む犬がぐつたりしてゐるもの当然だ。

宿は予約しておいたので海側の最上の部屋に

通された。今日は登り六時間、下り三時間の運動。大塚先輩は足腰が痛いと云うも達者な

もの、僕達もあと二十年は充分と楽しめると思えば、心強くなつた一日であった。

八月十五日 鶴泊から礼文島の香深迄十一時四〇分発の連絡船一本だけしかないので不便この上なし。大塚さんは沓形の道銀に寄り、

我々は姫沼見物。今日も利尻岳は顔を見せず写真から想像するのみ。島はお盆休みでバスは混み、連絡船も旅行客で一杯である。

礼文島は南北に細長く全体山でおおわれ、町は数える程しかない。東海岸はバス道が走つてゐるが、西海岸は絶壁をなし遊覧船で眺めうるのみ。香深下船と同時にマイクロバスに乗り込み桃岩へ向う。高山植物で有名な場

所であるが十分位しか時間の余裕がないためトンネルを出た場所から礼文島の西海岸と桃岩を眺めて直に引返し、十四時発の船に跳び乗つた。礼文島上陸はわずか一時間余り、強

制的に島に泊らす為の船ダイヤとしか考えられない。観光客の便を無視されているのに腹を立てる。十七時三〇分稚内着、大塚さんにスキ焼をご馳走になり、夜行にて帰途についた。

黒薙尾根より白馬岳

（学生二年）
儀 昭

やらいい山行だナアと自画自讃。

六月九日 ガス、雨

天氣図によると午後からは雨、それにガス

五月の谷川合宿への車中で、ひとつおもしろい山行をとこの山行の話が決まった。黒部川・黒薙から突坂山・猫又山を経て、清水岳に至り、白馬岳から鹿島槍ヶ岳まで縦走しうとい計画である。

記録は、関西学聯報告第五号に関大の吉田孝雄氏が白馬岳から下ったといふのを知っているだけで、あとは地図と磁石に頼り勇気と頑張りに期待することにした。

参加：岡田健志（四年）儀昭（二年）

六月五日 晴 黒部——宇奈月——黒薙
笠平営林小屋

尾根の取付きを偵察。お茶を飲みながら山の話などする。静かな夜だ。

六月六日 晴、雷雨 笠平——1100m地点
重い荷でついつい主尾根からはずれる。ヤブをあえぎあえぎ登る。先が不安となつて二百米辺りの雪田で荷を解く。突坂山までボクカ。帰途凄い雷雨にみまわれ、夜はツエルトの中でガタガタ震える。

六月七日 晴 ビヴァーク地——ビヴァーク地
睡眠不足の体に藪こぎは辛い。突坂山では大休止。池があつてなかなか好い。その後は鳥のさえずるなかを猛烈な藪こぎ。足の踏み場もない繁りようで鋸で切る。おまけに尾根が極度に細くなつて、こんなのは地図にない

としきりにボヤク。樹との格闘に疲れはて、現在地も判らずそのままビヴァーク。人間は偉いものだと妙なところから感心した。

六月八日 晴 ビヴァーク地——1960m台地
苦闘が始まる。樹間の剣が励ましてある。ウンザリした頃、雪田発見。くず湯をつくり水をつめる。それからは残雪続きで樂になる。

大シラビソの間から清水岳が望まれた時はホッとした。大シラビソの窪に念入りに設営。ツエルト・天幕フライ併用で立派なものである。暮れなずむ山なみをみやりながら、少し里心づく。越後平野の灯がたまらなくてツエルトにもぐりこむ。先程までの苦闘はどこえ

跡をみつけて感心し、ローソクや漬物を拾つてきた。雲海の彼方に剣鹿島五竜と素晴らしい眺めである。あとはツエルト内でくつろぐ。詩を読んだり歌を唱つたりして山の味をたんのうした。外は荒れ模様だが、極めて居心地良い。天狗平では雪という。

六月十日 雨

乳白色のガスにシラビソが影となり幻想的大。ラジオは入梅を伝える。うまいものをたっぷりつくる。語らいも白馬まで一日とあれば、はずむ。雨のフライを打つ音も気にせずモーツアルトから都はるみまで楽しんだ。

六月十一日 雨・ガス

寒い寒い。三時頃から起き出してラジウスにあたる。山にいることだけでも嬉しいが、三日も停滯となると少々ヘンになる。やたらに食べて大声で歌をガナツた。明日は何が何でも出発と決定。

六月十二日 晴—曇—晴

行動するとなると晴れ上つた。アイゼンで

ヒヨコヒヨコ歩き出す。コル付近で一大轟音

と共にロック雪崩発生。猫又山まで快適な

登りが続く。剣がお城のようだ。清水岳直下

の雪面は急で、ステップをつくりながらの樂

しい登行であった。ここで昼食。ここからは

縦走路がみえがくれしていへばどる。前旭

岳からは新雪の斜面がいくらかあってイヤな

思いをした。清水谷上部に多くの人影をみつ

ける。遭難者の捜索らしい。白馬岳ではよう

かんで登頂を祝った。縦走したいが針葉樹会

総会が控えているので下山と相成る。大雪渓

はグリセードできぬので、ままよと尻セード

で下った。途中シユルンドで顔面をぶつけヒ

ドイ目にあつた。猿倉山荘の横に幕営。あと

一日残って白馬主稜をうかがうといふ僕は、

口説かれて到頭明日下山することにさせられ

た。白馬の上に星が輝いていた。

六月十三日 快晴

雲ひとつない鮮やかな空。談笑しながら細
野まで歩く。白馬三山不帰の險がコバルト色
の空にくっきりと空線を刻んでいる。岡田さ
んがグチることグチること。バス停でビル
にて乾杯。薄汚い顔がほころぶ。岡田さんは
そのまま帰京。僕は神城の下川氏宅に寄る。
おばさんから、いろいろお話を伺う。
おだやかな午さがりだった。

会務報告

中島寛

一、忘年会

恒例の昭和四十一年針葉樹会忘年会は、去る十二月十五日如水会館南北日本間で行なわれた。はるばる福島県から遠来の冠木大先輩、昭和三年卒の四名全員出席をはじめとして戦

前卒の会員の出席率がよかつたのにひきかえ、若手の出席者が少なかつたのは残念だった。

例によつて、昔話に花が咲き、一とうり近況報告しあつた后、老若ひざつき合せて車座になり飲みくらべた。年令が二まわりもへだたつてゐる間柄で、こうしてごく親しく話し合えるのは楽しいことでした。

八出席者▽ 中川孫一、五十嵐数馬、吉沢

一郎、村尾金二、松木謙三、近藤恒雄、冠

木伊右衛門、手塚晴雄、増山清太郎、鈴木

英雄、佐野茂雄、山田亮三、久保孝一郎、

小林茂雄、吉田義則、山本健一郎、中島寛、

大賀二郎、倉知敬、小島和人、佐藤之敏、

高崎俊平、原博貞、平川紀男以上二十四名

着々と準備が進められているが、一方、資金面においては、去る十一月、次の八氏に資金委員をお願いすることとし、正式に資金委員会が発足した。

吉田義則、中島寛。

十二月六日、才一回の資金委員会を行ない、針葉樹会内部でできるだけの資金的バランスアップをするべきであるという考え方の下に会員の協力を求める事になった。

一月十五日現在の応募額は約二百万円、入金額は三十六万四千五百円だが、現在も募金を続けており、詳しいことは、次の卒業年度別幹事にご相談下さい。

大15・昭6卒会員担当 村尾・近藤・昭7

・昭15 増山・望月・昭16・昭22 山田・

小村・昭23・昭29 伊藤・横山・昭30・昭

33 吉田・岡垣・昭34・昭38 中島・大賀、昭39・昭41 小島・高崎

① 資金委員会、
本年度実行予定の海外遠征について

② 登山許可交渉。外貨その他の関係から、力

ラコルムを第一目標とし、次の目標として
バタゴニアという一段構えをとっているが、

現在、カラコルムの登山許可を得るべく銳意交渉を進めており、二月中旬には結論が出る見込み。

③事務局開設。アンデス遠征の時と同様、大學當局の好意で一橋構堂の地下室を事務局として使わせてもらえることになり、一月

二十七日より開設。現在のところは一週一と二回の会議・研究会に利用している。

三、住所・勤務先・住居表示変更

△住所変更▽

根本 大 西宮市丸橋町一〇二ノ一メゾン西

TEL
宮三〇一三

TEL 西宮(六七)六二八二

新宿区住吉町三六

TEL (三五七)〇〇〇七

丸山則二 横浜市戸塚区汲沢町二一六九一二

峰高教通 尼崎市塚口町一ー三二一一

TEL 尼崎(四八一)四九五八

三股 宏 新潟市浜田中町五一七九 古山方

Gō Miss Penny Sahara

1608 Geddes Av. Arm

Arm Arbor, Michigan, U.S.A.

高橋信成 四日市市西浦町二二大善アパート

中橋寿雄 三〇八号

TEL<0五九三>(五三)一四二二三

三森茂充 大田区新井宿四一一一七
TEL (七七二)四〇二二三

△勤務先変更▽

根本 大 大阪市東区北浜五一一五 住友商
事大阪油糧食品部

TEL 大阪(一〇三)一一一一

間々田良雄 Mitsui & Co. (U.S.A.), Inc.
New York City Head Office 200
Park Avenue, New York, N.Y.
10017, U.S.A.

三森茂充 中央区西八丁堀二一一八重洲建物
ビル 東レシリコーン㈱

△住居表示変更▽

石田信隆 高槻市緑町一番四号 三菱銀行高
規察

四、会員動静

△結婚▽ 中橋寿雄(九月二十四日)

三股 宏(十一月六日)

△留学▽ 高橋信成 ミシガン大学に一年間

の予定で私費留学することにな
り、十二月一日横浜を発つた。

専攻はビジネスコース。その間
会社は休職。

本年度才四回目の、針葉樹会主催の山行と

阪勢の懇親山行の話に花が咲いた。今後の発展が期待される。

△懇親スキーチ
の予定で私費留学することにな
り、十二月一日横浜を発つた。

専攻はビジネスコース。その間
会社は休職。

本年度才四回目の、針葉樹会主催の山行と

阪勢の懇親山行の話に花が咲いた。今後の発展が期待される。

△大阪針葉樹会▽ 針葉樹会の会員が次才に
えてきたため、最近では各地域ご
との針葉樹会が盛んになっている

が、その中でも大阪針葉樹会は、

一月一回の例会をもって仲々活発である。次回は二月十日(金)午後六時、於、如水会大阪支部。現在の幹事は村上泰介、石田信隆、会員数二十名である。

△大阪針葉樹会▽ 針葉樹会の会員が次才に
えてきたため、最近では各地域ご
との針葉樹会が盛んになっている

が、その中でも大阪針葉樹会は、

冬山合宿報告——その反省の記

倉 知 敬

今年の正月にも、例年のようにOB冬山合宿が行なわれたが、一週間程続いた大陸高気圧

の強烈な吹き出しのために、殆ど何も為すところなく終ってしまった。連休が悪天候になると必ず遭難が続出する昨今的情勢から、今

回も何か起りそうな気配を感じたが、元旦の日に降った豪雨のための雪崩遭難が、身近かなところでバタバタと起り、もう自分達が遭

難に出会わなかつたのがもつけの幸いといつた風な有様で帰つて来たという次第だった。

今年は、去年卒業の若々しいOB達が張切っていたので例年になく高度な計画が立てら

れ、明神岳五峰東壁、屏風岩東壁、前穂東壁、という三つの東壁と、前穂北尾根が対象になっていた。今更余計のことだがどういうパーティでそれぞれ登るつもりだったかを記してみると、次の通りである。

明神東壁 敏 池知昭洋、原 博貞、佐藤之

屏風東壁 佐藤久尚、倉知 敬、
前穂東壁 中島 寛、高橋俊平

北尾根 小島和人、平川紀男、岡田健

志(学生)

で、結果はどうかというと、わずかに北尾

根を二日かかりで中島、岡田の二名が登った

が、他は壁にサワリもしなかつた。ところが、

北尾根も、あの悪天によくぞやつたと皆から

ほめられたかと云うととんでもなく、あの絶

望的天候を無視し常識はずれの行動をしたの

は、運よく無事に帰つて來たものの猛省を要

すと、はなはだ評判悪く、登った當人達も肩

身のせまい思いをしたような具合だった。

さて、我々は各々都合の良い方法で上高地

へ向い、大方が上高地は河童橋のふもとに集

合したのが一月一日だった。その日は朝から

冷たい雨が降つて何も出来ず沈黙、翌日はこ

の雨を降らした低気圧が東に去つたものの、

定石通り西高東低の冬型気圧配置となつて、

厳しい吹き出しにホンロウさせられた悪魔の数日が始まった。小雪の中を、明神組は養魚所へ、その他は皆一緒に奥又本谷の出会いにベイスキャンプを移した后は、もう殆ど何も書くべきこともない。唯々寒いテントの中で、帰る時がくるまでジツと待っていた、といえば一番ピッタリしよう。

さて、山が終ってから皆の間で大いに問題になつて反省の材料とされたことが二つあつた。

一つはいうまでもなく、風雪の北尾根での「無暴」な行動について、もう一つはOB合宿のあり方について、である。今更反省でもないだろうが、登山そのものについては何も書くこともないし、そういうことが眞面目に話し合われたということは記録にとどめておくべきだろうから、少し書いておきたいと思う。

まず最初の問題については、いろいろ議論されたが、一言でまとめていえば、冬山での行動の限界はどこか、ということになろう。完全に西高東低の天候では、はつきりした改復の見通しがない時には、どんなベテランだって、客観的にみて、絶対に行動を起すべきでない、それが高所キャンプから脱出などという緊急の事態でなかつたならば、——というのが下で待たされた連中の、「氣違ひじみた」北尾根パーティへ対する卒直なる批判である。それに対し、当事者の中島のいうには、決して登れない状態ではなかつたから、悪くなればいつでも引き返すつもりだったから、しどく安全で、お前らの心配は一寸オーバーだ、ある程度の未知数があるのは認めるが、そん

なのは登山につきものだ、という答。

この点は全く平行線で、どっちが正しいという判決は下ろせないが、二人がお互にあまり一緒に登ったことのない即席パーティであること、周りに遭難が続出していたこと、出発の時ビヴァークしないと云つて行ったこと、それに何といっても、悪天の下での客観的な危険性の増大を否定できないこと、など

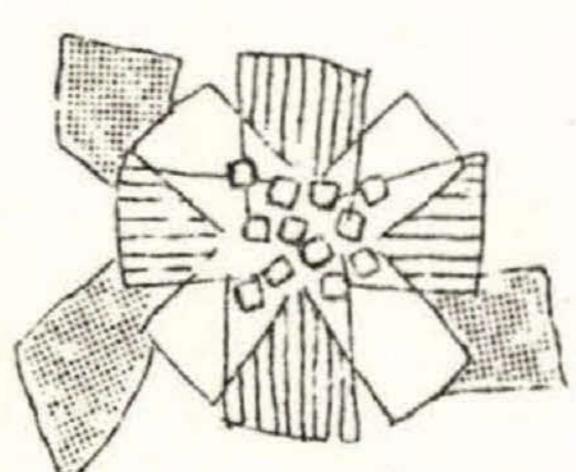
の点からして、中島らの不利はまぬがれ得ないところである。

つたと思うのである。三つもオ一級の冬の岩場に向うパーティが出るとすればそれだけ遭難の潜在性も増えるわけで、一旦ことあれば、やはり同じクラブのメンバーしか頼れるものはないのだから、出来るだけお互いやうりあつてクラブとしての活動を尊重するような方

向をとりたいものである。

一応山岳部の訓練を経て、皆かりにも一人前の登山家になったのだから、それ／＼好きな登り方をして居れがよいのだが、一年に一度位、しかも一番きびしい条件にある時などに、クラブとしてまとまった目標をもつことは必要でないかと思う。

× × × ×



野沢・懇親スキー行

倉 知 敬

二月十一、十二日

於・野沢温泉さかや旅館

今回はいろいろと骨の折れた懇親スキーでした。まず、場所を決めるのに、ツアーチの出来るところというので、鹿沢だ、梅池だ、といろいろ当ってみたところ、全部満員、いよいよせっぱつまつて、昔からよく聞いていた野沢の「さかや」はどうだろう、と思いついて早速電話したところ、

「一橋サンは昔からのオ得意サンで、先代からも大事にしろといわれているので、一番上等の部屋をあけて待って居りますから、ぜひどうぞ。」

という訳で、文句なく渡り鳥さえ寄るという野沢へ出掛けることになった次第。

しかし、今度新らしく出来た建国記念日の連休をつかってやろう、という魂胆は、どうもあまりよい考え方ではありませんでした。といふのは、新聞などでご承知のとおり、何かも大変な込みようで、まず上野の駅に行っ

て驚きました。丸で構内はスキーの林で、ワーンと混乱のルツボと化し、皆と会うなどというのは全然不可能。結局、てんでバラバラに、ある者は一晩中、片足で立ったままで、長野へつくというような有様、これに驚且しました。上野で回れ右をした人も二、三居りました。く最高でした。下りの樹間滑走も又すばらしく、一気に野沢まで小一時間程のダウンヒル

と一人ずつやって来て、午后になつてもまだ旅館の方も驚いたことでしょう。バラバラと一人ずつやつて来て、午后になつてもまだあと何人来るかわからないという始末、それでも最後に何とか一人そろい、一番上等のりっぱな部屋に予定どおり入れてもらいました。

それからは帰りの乗物がまた、大いに心配でしたが、時刻表を大いに研究し、先手／＼と立ち回るようになり方をして、無事全員はじめから終りまで、すわって帰つた。

十一日は、着いた順にゲレンデへ飛び出して参りました。

これまたすごい人込みの中を、かきわけかきわけすべっていると、あの広いところでも、その内にはぶつかることもあるもので、そこでお互い、ヤアコンニチワ、と初めてあいさつを交したことでした。

さて、翌十二日は小雪ちらつき、あまり上天気ではありませんでしたが、リフト終点の酒屋さかやという我々お馴染みの宿屋、今年で丁度足かけ四年の通い詰め。話すきなおかみさんと余り商売氣のないおやじさん、それに若夫婦お孫さん二三人、といった風な至極心のにおける人達。——「御免」と這入れば「まあ——ようこそ」と、気易く挨拶される。

——松倉栄司「野沢の事ども」
針葉樹二号より

雪は、ほんのベンドがもぐる位の、丁度手

× × × × × × × × × × ×

カラコルム遠征先遣隊報告

——その4——

六、ミール・サミール登頂

佐藤之敏

ヌーリスタンで一番早くから注目された山はミール・サミールであった。それは山容が凜々しい上に孤立しているので、よく目立つた。ミール・サミールという名はどこからきたか、ハッキリした答はない。ただ、地元に次のような伝説が残っている。

ずっと昔、ノアの洪水が地上を覆った時に、この谷に水がおし寄せて来て、ミール・サミールをも侵し始めた。すべての生物が溺れて行き、最後の一匹の山羊がミール・サミールのてっぺんに逃れた。水は次第に増してその山羊の腹のところまで来た時、やっと減水し始めた。それ以来、山羊の腹は白くなつたといふ。

深田久弥「ヒマラヤの高峯ミール・サミール」より

八月二一日。中央ヒンズークシの昼間は、実に暑い。氷河の表面をおもう雪が融け出して、アフタヌーン・フラッドが、そこかしこに出現する。

正午すぎ、丸子、佐藤の二人は、南西氷河四八五〇メートルのオニキャンプから、南西稜の偵察に出かけた。

この日の偵察行は、精神的にも肉体的にも、実につらいものだった。下痢上りの丸子さんはかなり苦しそうだし、私にしたって連日の行動と、それに加えて、この猛暑。体がだるくてしようがない。南西稜コルまでの雪の大斜面が、どんなに長く感じられたことか。しかも行く手に待っているのは未知の絶望的とも思われる大岩稜。今のが我々に、どうしても登ろうという意志があるかと問われたら、からずしもイエスとは云えまい。私は、それが六〇〇米そこそこの山であるにしても、小人数のパーティでこれにいどむことの難かしさをつくづく感じた。それを巧みにやり遂げるには、全員がスピードインフルに動くことが必要である。しかしここに来て、それがなかなか困難であることを痛切に感じたのである。

結局、この日の偵察は高差百米の危険な岩登りを強いられ、その上、大した見通しも得られずに終つた。

八月二二日。早朝六時半頃、オニキャンプから登つて来た甘利さんに、私はたたき起された。前日の疲れで、まだ寝ていたかったが、そうは云つていられない。我々に残されている日数は、あと一週間もない。ともすればデクラインしがちな気分をもりたてて、最後の可能性まで見極わめなくてはならない。甘利さんと私は、八時に、オニキャンプを出た。今日こそはと、二百メートルのフィックス・ザイルと大量のアイスハーケンを持った。朝の内は、昼間の猛暑が信じられない位寒くて、むしろ快よい。我々は、今までの行動の中では最も快調と思われるペース

で南西稜に達し、稜を百米程登り、岩稜の向う側を、丹念に見た。そして我々は、南西稜と南稜の間隙をカバーしている大バットレスの急峻に落ち込む一本の黒いラインの中に、その单调さを破るが如き、短かくはあるが緩いラインのあるのを、ふと発見した。

そりだ。そこには緩いバンド状の氷面が続いていた。南西稜を避けてこのバンドを南稜側にトラバース出来れば、或るいは容易なルートが発見出来るかも知れない。我々二人は、胸をときめかせながら右へ右へとトラバースして行つた。途中の雪の斜面には、南米のアンデス等に独特のニエベ・ペニテンテが見られる。それは、高さ一尺ないし二尺の冰雪のピラーであり、あたかも鐘乳洞の石筍の乱立を見るようである。

アイスガリ一は長さ約一五〇米。初め遠くから見て緩やかに見えた傾斜は、真下に来てみると、かなり急である。

ル。私の頭の中には、イギリス隊がこのガリ
ーの登降に十三時間もかかったという事が、
まざまざと浮かんで来た。

私はザイルを結び、アイスガリ－の入口に先ず一本目のハ－ケンをガツチリ打ち込んで登り始めた。初めの四〇米は傾斜四五度位、それ程急ではないが完全な氷である。この辺りはガリ－の巾が狭く、二米程、正に廊下である。両側の壁に両手をつっぱったりして弾ึに登り切る。いちいち氷にピックルでステップをきさんでいたら時間がかかるってしようがないので、適当になだめすかすように登る。次の四〇米は傾斜五〇度程で、ガリ－の巾はやや広く、約四米、両側の岩壁は高さ七、八〇米、垂直に切り立っている。太陽が真上にあった時はガリ－底まで明るかったが、一

時頃になると太陽の光は、直接底までは届かず、ガリ一内部は何となく薄暗い。その薄暗い岩と氷に閉ざされた階廊の中を二人の人間がジワジワと登って行く。聞えるのは氷に歯り込むアイゼンとピッケル、そして時折打ち込むハーケンの音だけ。

彼らの失敗は、このガリーに十三時間も掛
け、それもアタックの当日に一気に登り切つ
てしまおうとしたところにその原因があると
我々は考えた。そこで今日はこのガリーのル
ート工作に一日かけ、下降の際に、補助ザイ
ルを固定しておく。アタックの日には、その
固定ザイルを利用し、このガリー登攀の時間
を大巾に短縮して登頂成功をかちとろうと、
もくろんでいたのであるが、どうもこの調子
だと、そのルート工作さえも今日中に、出来
そうもないよう思えて来た。あと七〇米を
どうしても三時間以内に片付けなければなら
ない。

このペニテントの斜面が尽きる所まで来て
はるか上を見上げると、そこの南稜へ直角に
突き上げて いる氷のガリーを発見した。イギ
リス隊の云っていたアイスガリーとはこのこ
と。か。彼らは南西稜のことしか触れず、しか
も、その中で急峻なアイスガリーの登攀に困
難を極め失敗したのだとは教えてくれたが、
南西稜からのトラバースには、うかつにも何
程の言及も与えていなかつたのである。この

このガリ一の入口から登り始めたのは十二時、今は二時半。三時間半たつというのに、我々二人がかせいだのはたったの八〇メートル

米はほとんど垂直であつた。

次の四〇米は、傾斜はますますきつく約六〇度、雪が乗っているがその下は完全な蒼冰である。表面の雪に騙されて不用意に足をむろそうものなら蒼氷はアイゼンをガンとはわづけて、登攀者を滑落の運命に落すであろう。残りの三〇米は六五度から七〇度、最後の五

めて引き返えそうと苦言を呈した程である。

時刻は、四時半、夕闇がせまり、しかも、雲行きがあやしく、ついに小雪まで舞い出した

……。

やつとのことでこの垂直の雪壁を登り切り、ガリ一のトップに着いたのは、四時五〇分、我々はそこで小休をとった後、直ちに下降にかかった。帰りは補助ザイルをガリ一に固定しながらの下降だが予想外に時間がかかり、ヘトヘトになってオニキャンプに着いたのは、真暗闇の八時だった。

八月二六日。いよいよ待ちに待った頂上攻撃の日である。我々のオニキャンプが四八〇〇米、頂上は六〇六〇米、標高差一二〇〇米以上のアタックである。しかも六千米の高度の影響が身体に現われてくるだろう。

ともかく我々は、朝六時にオニキャンプを出発した。途中までは知りつくしたルートなので、快調に飛ばし、八時半にはガリ一の下に着いた。問題のガリ一は苦心の固定ザイルを使ってたつた一時間半で仕上げ、我々は、午前十時には既にガリ一の上五三〇〇米に立った。

ガリ一のトップは、丁度南稜の上部に位置

し、我々は一旦そこから五〇米ばかり向う側

のペニテンテと岩のミックスした斜面に降り立ち、そして約七五〇米を頂上に向って登る

のである。

我々はグングンと登っていった。ペニテンテの斜面は、いちいちその氷柱をこわして登る訳にもいかず、脚を高々と挙げては一步一歩登って行くので、全くしごかれて閉口した。歩一步確実に登って行く。もうあまり傾斜は正午近く、我々はペニテンテの斜面を終り、急峻な岩壁の基壁の基部に着いた。高度は約五六〇〇米位であろう、甘利隊長も丸子氏も

高度の影響でかなり苦しそうだった。かくいう私も初めて高度の影響を経験した。頭が痛くて吐き気がする。

この岩壁の基部で我々は昼食をとり、アイゼンをはずして、岩登りの用意に取りかかった。約三五〇米の岩登りである。やはりここでも若いからということで、当然のように私はトップで登ることになってしまった。傾斜た。約三五〇米の岩登りである。やはりここ

の影響が身体に現われてくるだろう。

日本山でもよくあることだが、頂上だと

ケンを打つにとどめた。

こうしてこの岩壁を登り切り、再び雪の斜面にたどりついたのが、二時。我々は再びアイゼンをつけ、斜面をゆっくりと登って行った。頂上の高度六〇六〇米が正確ならば、あと残り百米程で我々は頂上に立つ。

我々はやりたつ心を抑えるようにして一歩一步確実に登って行く。もうあまり傾斜はきつくなく、ザイルは解いて三人は自分自分のペースで登って行く。

日本の山でもよくあることだが、頂上だとあってガツクリすることの心苦しさを知っている私は、あれは頂上ではないのだと無理に思って行ってみると、その向うに真の頂上がいる。自分の心に言い聞かせながら登る。雪の斜面はいよいよ緩くなりついには平らになった。その向う側に北方の空が続いている。何もなかった。ただ、青い空間が果てしなく続いていた。二時三五分、我々は六〇六〇米の頂上にたつたのである。

頂上から周囲を見わたすと、このミール・サミールが一段と高いのがわかった。はるか北を望めば、ソ連の山々、西を望めば、パキスタンのカラコルムと思われる山並が、はるか彼方に望まれる。一つの山の頂上にいて実

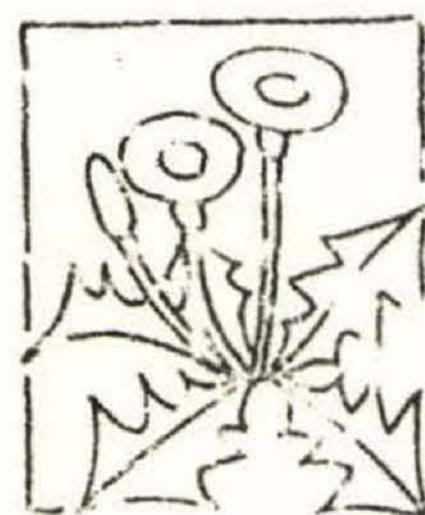
に貪欲のようだが、来年は是非カラコルムの七千メ級の山に挑みたいという新たな欲望がもくもくとわいて来た。

我々は頂上で三〇分程食事をとつたり、記念撮影をしたりして下山し、午後三時過ぎ、綿のように疲れはてて、やっとオーキャンプにたどりついた。

この登頂成功後は我々はオーキャンプでゆっくりと休養を取り、懐かしいベースキャンプに降りていった。ベースキャンプに残つていた通訳とは十日ぶりの対面で、彼は大いに感激していた。その夜は彼が持参したライフルで撃った鹿の肉のすきやきや天ぷらで、登頂成功を祝つた。

その後再び、ミール・サミールダリオ、バンシール谷とキャラバンをして、我々はバスの待つタシユトリバットの村に向つた。黙々と山を下るキャラバン、夕日の暮れゆく中央アジアの高原を、三人で疾走したあの楽しさは一生忘がたい良き憶い出となろう。

×××



◇編集後記◇

会費集めにいささか苦労したかいあって、やっと一ヶ月遅れて十七号を発行出来るはこびとなりました。今回は、いろいろ思つた通りにいかぬこと多く、当初とは大分ちがつた感じとなつて、はなはだ不本意なのですが、致し方ありません。ミール・サミール遠征記も、やつと登頂するところまで行き、ホッとしました。この連載が終つたら、一橋山岳部五十年史をやれ、といわれていますが、これは何とか実現したいと思つています。皆様もよろしくご協力の程お願い致します。

(倉知)

表紙写真説明

北面より見た
ミール・サミール峰

丸子博之撮影

